

死者の問題のための いくつかの形而上学的枠組みについて ——マイニング主義の検討——*

吉沢文武

概要

In this paper, I distinguish three conflicts between our commonsensical understandings of the dead: (1) a conflict about the harm of death that the dead suffers, (2) a conflict about the relations that the living person bears to the dead, and (3) a conflict about the reference of the name of the dead. Then, I argue that we need a metaphysical framework to solve the “Problems of the Dead” which result from these conflicts. After evaluating the consequences of some frameworks, I suggest that Meinongianism not only solves the problems but also accords more closely with our intuition of how we should talk about the dead, although the Meinongian framework is often considered “queer.”

Keywords: Problems of the Dead, harm of death, Meinongianism, welfare, metaphysics.

1 終焉テーゼ

次のテーゼは、われわれがもつ死についての基本的な理解の一つを表していると思われる。

終焉テーゼ (termination thesis) : 人は死ぬとき、端的に存在しなくなる^{*1}。

死とは「われわれの存在の絶対的かつ永久的な終焉 (end)」^{*2}であり、死とは存在しなくなることである。あ

^{*1} Feldman (2000), p. 100.

* CAP Vol. 4 (2012-2013) pp. 1-18. 受理日: 2011.7.21 採用日: 2012.6.18 採用カテゴリ: 研究論文(原著論文) 掲載日: 2012.7.9.

たかも死者が死後にもなおどこかに存在しているかのように述べる人もいるだろう。だがそのような語り方の多くは、悲しさを帯びたものにちがいない。というのも、そのように言う人はきっと、死んでしまった人が存在していないことを本当は理解しているからである^{*3}。

死者はすでに存在しない。そこから次のことが導かれると思われる。死者には身体も意識もなく、死者が怪我をしていたり痛みを感じていたりといった内在的状态をもつことはない。それゆえ内在的状态の変化を被ることもない。このような考えは、われわれ自身の死についての理解を、終焉テーゼのような明示的な形で反省したとき、自然に認められるものだろう。しかしこれから見るように、この考えを額面通りに受け入れるのはそう容易ではない。

われわれには、終焉テーゼと一見して相容れない死についての諸理解がある。たとえば、死は死んだ本人にとって不幸なことだと通常考えられている。われわれの不幸のなかで自分の死ほどの不幸はないとさえ言われる^{*4}。また、死者のなかには死後にも生前と変わらずに愛される人がいる。死者に対してだけ向けられる追悼のような態度もある。そして、死者の名前は指示対象をもつ有意味な名前に思える。

前段落の一群もまた死者についてのわれわれの常識的な理解を構成している。だが終焉テーゼを思い出してみよう。存在しない対象が指示され、愛され追悼される。これはどういうことなのだろうか。死者が存在しなくなるとは、われわれに指示され愛され追悼されるまさにそのような対象が存在しなくなるということではないのか。つまり、指示を行い態度を向けることができなくなるということではないのか。存在しないものが害を被るとはどういうことなのだろうか。それは、まさに害を被る当の主体が存在しないということではないのか。つまり、害を被ることなどないということではないのか^{*5}。

以上のように終焉テーゼは、同様に常識的なわれわれの諸理解と衝突するように見える。こうした図式を基本的に共有したうえで、「死者の問題」について主に英語圏の分析哲学において近年議論が盛んになってきている。そして、私の考えでは、この理解の衝突を調停するためには形而上学の枠組みの提出が不可欠である^{*6}。

^{*2} Nagel (1979), p. 1 [邦訳 1 頁]。

^{*3} F・フェルドマン自身は、人が死後も死体として文字通り存続するとして終焉テーゼを拒否する(Feldman (2000))。私はこの考えに反対であるが、いずれにせよ、本稿で論じる死者は死体のことではない。死体の残らないような死のケースでも本稿の議論が成り立つ点に注意されたい。

^{*4} 本稿では論じないが、死者は「死の害(harm of death)」の他に「死後の害(posthumous harm)」も被りうると考えられている(二つの害は「死にまつわる害(mortal harm)」と総称される)。「死後の害」と「死の害」の二つの害は通常次のように区別される。「死後の害」とは死後に起こる出来事の影響としての害である。たとえばある人の死後にその人の家族が苦しい生活をおくることは、死んでしまったその人にとっても悪いことだろう。「死の害」とは、死そのものが死んだ人に与える害である。死後に望まない出来事が起こるといったことがなくとも、死はそれ自体で死んだ人にとっての不幸だと考えられている。ちなみに死の害は、死にいたる過程における苦痛などの害と区別しなければならない。死にいたる過程における苦痛などの害は、あくまで生きていたる過程における通常的な害である。なお念のために述べれば、ここで言われる「害(harm)」は、その語から通常連想されるような内在的な損傷や不快感に、必ずしも限定されないので注意してほしい。また、利害や幸不幸といった「福利(welfare)」と区別される価値的概念である「人生の意味(meaning of life)」と死の関係については吉沢(2011)を参照されたい。

^{*5} この衝突は、対象と性質に関する次のような考えを前提とするだけで生じる。つまり、ある性質を何かもつためには、その担い手となる何かが必要不可欠である、という(おそらく自明な)考えである。

^{*6} ここで言う形而上学的枠組みとは、とりわけ、人の存在と時間との関係について系統的な説明を与える一般理論のこ

以下で今日論じられている主要な見解のいくつかを検討するが、それらの見解のそれぞれのポイントを掴みやすくするために、終焉テーゼと他の諸理解とのあいだの衝突を次の三つに整理したい。

- (1) 死の害を被ると思われる主体が死後には存在しない。
- (2) 生きている人と関係に立つと思われる対象が死後には存在しない。
- (3) 有意味であるように思われる名前の指示対象が死後には存在しない。

これら三つの衝突を解決するという問題に答えられるかどうか注目することで、主要な見解のそれぞれを検討する。第2節と第3節で、「剥奪説 (deprivation account)」と「ピッチャー＝ファインバーグ説」(以下「PF 説」)という、死の害に関する二つの代表的な見解を見る。そこで私は、剥奪説と PF 説がいずれも単独では上記の三つの衝突について説明しないことを指摘したい。説明しない理由は、二つの見解が特定の形而上学の枠組みに対して中立的なことにある^{*7}。

上の三つの衝突を解決するには形而上学的枠組みが必要である。第4節と第5節では、そのような形而上学的枠組みとして「マイニング主義」と「四次元主義」を見る。続いて第6節で、それぞれの枠組みが三つの衝突に対してどういった帰結をもつのかを吟味する。それらの過程で私は、マイニング主義が優れていることを示唆するが、その示唆を、これまでなされてきたのとはおそらく異なる観点から行う。すなわち、マイニング主義が正確にはどのような点で有利であるのかを、私はこの論文で示したいと考えている。(上記の衝突は、対立する常識や直観を調停することによってではなく、それらのいくつかを無視することによって回避できると言われるかもしれない。第6節ではどの直観を尊重するかに関して二つの選択肢に場合分けしたうえで論証を行うが、いずれの選択肢のもとでもマイニング主義の優位性を見ることができるということをそこで提案したい。)

2 剥奪説

剥奪説は、T・ネーゲルをはじめ複数の論者によって明示的に支持されている見解であり^{*8}、死の本質を可能的な善の剥奪として説明する。剥奪説による死の害の説明は次のようなものである。死は死ぬ人にとって不幸なことであり、死者は死の害を被ると考えられている。その死の害とは「死ななければ得られて

とである。

^{*7} 特定の形而上学的枠組みの不可欠さは自明であると言われるかもしれない。だが実際のところこの点はそれほど理解されていないように思われる。たとえば一ノ瀬(2011)の第5章第8節のように、死の害についての見解である剥奪説が、形而上学的な枠組み(一ノ瀬の呼び方では「存在論的対応」と同列に主張可能な学説であるかのように語られることもある。死をめぐる議論が倫理学や価値論の文脈で主に論じられてきたという経緯を考えれば(たとえば *Midwest Studies in Philosophy* 24を見よ)、形而上学的枠組みの不可欠さを強調することは依然として価値があると私には思われる。実際ユアグローも、死者の存在論的な身分の解明の重要性に対して多くの論者が無自覚である点を、多くの分量を割いて論じている(Yourgrau (2000))。

^{*8} Nagel (1979)。剥奪説の論者には他に Feldman (1991), Feit (2002), Bradley (2009), Luper (2009)らがいる。剥奪説についてのより詳しい議論は吉沢(2009)を参照されたい。

いたであろう善」が死によって剥奪されることで被る害である。たとえば、ある人が当選している宝くじを不注意にも捨ててしまったとしよう。もちろんそれに気づいた場合、その人はひどく落ち込むにちがいない。だが、その人はついにそのことに気づかなかったとしよう。それでもその人が害を被っていると、われわれは言いたいだろう。気づいたときにその人が落ち込むのは、害を被っていたことに気づいたからであり、落ち込みという心的状態(これもまた害である)がここで問題とされている害なのではない。その人が被った害は「当たりくじを捨てていなければなされていたであろう大金の獲得」という善を得る機会を失ったことによる害である。死によっても多くの可能的な善がその意味で「奪われる」と考えられるため、そのような善の剥奪は、死が死者に害を与えるということを説明するように見える。

剥奪説は死の害がどのような害であるのかについて説明する。しかし死がいつ害であるのかについて主張しないため、次の問題が残る。多くの哲学者達がもっともなものとして前提としてきた一般原理によれば、災厄が人に対して当の害を与えるのは、その災厄の発生以降である。この一般原理に従うなら、死による害もまた死後に被るのでなければならない⁹。だが、死の害についてそのように述べるのは困難である。終焉テーゼによれば死とは存在しなくなることであり、性質を帰属させられる人は死後には存在しないからである。これが上記(1)の衝突である。

あとで見るように、われわれは死の害を死後に被るという見解を本稿では擁護する¹⁰。だがかりに死の害を被る時間が死後以外であると主張できれば、(1)の問題には一定の答えを与えることができる。実際ネーゲル自身は死者が害を被る時間と場所について「不明確」と答える¹¹。また、人生全体の幸福と別様にありえた(可能的な)幸福との比較によって「人生全体」に害が帰属すると考える論者もいる¹²。しかしながらいずれにせよ次の困難が残るだろう。すなわち、もしそれらの見解が正しければ、死によって害を被る死者aについて、たとえば死後述べられる「aは無時間的に害を被る」や「aはその人生のあいだずっと害を被っていた」は真である。だが終焉テーゼによれば、死んだ人は死後には存在せず、名前「a」はなんら存在者を指示しないことになる。剥奪説はそれらの言明がどのような意味で真だと言えるのか(すなわち(3)の問題)についてそれ自体説明を与えるものではない。また剥奪説は(2)についても説明しない。

3 ピッチャー＝ファイバーグ説

PF 説は G・ピッチャーや J・ファイバーグによって主張された見解である。その見解によれば、死の害

⁹ Feit (2002), esp. p. 359. エピクロスの有名な論証もこの一般原理を前提としている(注 31 を参照)。また生前説を主張する S・ルーバーも、害を被る時間に関するこのような考え自体は「害(harm)」の日常言語の用法にかなう妥当なものだと述べる(Luper (2007), p. 242)。

¹⁰ この見解を採る論者には Yourgrau (1987), Feit (2002), Bradley (2009)らがいる。

¹¹ 「[……] 損失を被った個人の時間空間的な位置は十分に明確であっても、不幸それ自体はそうかんたんには位置づけられない、と言えよう。」(Nagel (1979), p. 7 [邦訳 11 頁].)

¹² Feldman (1991). ただしフェルドマンは「死者は死の害をいつ被るか」という問いに対し、明示的には「永遠(eternally)に」と答えている(ibid., p. 221)。

は、欲求や利害関心とその充足に基づいて説明される^{*13}。一般にわれわれは、ある出来事の生起に対して欲求をもつ。また、ある人のもつ欲求の充足と挫折がその人の幸不幸に対して影響をもつと常識的に考える。死は、ある事業を自分で完成させたいという欲求や、生まれてくる子供の顔をこの目で見るといった欲求など、その人が生前にもつ多くの欲求を挫いてしまう。その意味で、死は死者に対して害を与えるというわけである。

PF 説は、そうした害を被る主体が「生前の人 (antemortem person)」であると説明することで、(1)の問題の解決を目指す。それゆえ PF 説は「生前説 (priorism)」とも呼ばれる^{*14}。ファインバーグは次のように述べる。「死における害の主体は、彼の利害関心が挫かれる生前の生きている人である。人の死という事実は、彼の生前の利害関心が挫折させられることになっていったということを“真にする”のであり、その意味で、彼に差し迫る死はまだ彼に知られてはいなかったにもかかわらず、生前の人その死によって害されていたのである。」^{*15}つまり生前説によれば、死によってある欲求を挫折させられる時間ではなく、当該の欲求をもっていた時間に害が帰属させられるのである^{*16}。このようにして PF 説は、生前説を伴うかぎりたしかに(1)の問題に対して一定の答えを与える。しかしながらもし PF 説(生前説)を採用したとしても^{*17}、前節の剥奪説同様、(2)と(3)の問題は残る。

ここまで、剥奪説と PF 説のいずれも、単独では前述の三つの問題をすべて解決することはできないということを確認した。以下では、三つの問題に答えるための代表的な形而上学的枠組みとしてマイノング主義と四次元主義を見る^{*18}。

^{*13} ピッチャー＝ファインバーグ説の論者には Pitcher (1984), Feinberg (1984), Scarre (1997), Luper (2007)らがいる。『ニコマコス倫理学』においてアリストテレスが同様の見解を示していると、しばしば指摘される。アリストテレスの見解に関する詳細な議論は Scott (2000)を参照。また、この PF 説と前節の剥奪説は相互排他的な見解というわけではない。たとえば、死によって剥奪される善を欲求充足に基づいて説明する立場がありうるだろう。

^{*14} Luper (2009), pp. 134-6 を参照。PF 説(生前説)は害の帰属時間に関する存在論的主張を含む見解であるが、それ自体あくまでここで言う特定の形而上学的枠組みを前提としたものではない。すなわちそれは、マイノング主義にも四次元主義にも開かれた選択肢である。注 26 も参照のこと。

^{*15} Feinberg (1984), pp. 187-8.

^{*16} ピッチャーは生前説によって死後の害を説明する。「死者に対してなされたいかなる悪 (wrong)も生前の彼ら自身に対してなされるのである。若きブラウンが彼の父の遺体を医学部に売るとき、彼が父の死ぬ前に父にした約束を、彼は破る。そのようにして息子の行動によって裏切られるのは、生きているブラウン氏である。」(Pitcher (1984), p. 161.)

^{*17} 私の考えでは、生前説は死の害の帰属に関する時間的な非対称性を説明しないため、死の害についての説明として不適切(ないしそれだけでは不十分)である。それについては本稿第 6 節の議論を見られたい。また、たとえば Portmore (2007)は、欲求充足に基づく PF 説の説明自体が受け入れがたい帰結をもち、そのような帰結を避けるには、死後の出来事を含む未来の出来事による影響を拒否しなければならないという批判を行っている。

^{*18} 他の選択肢が提案されていないわけではない。たとえば、そのなかでも考慮すべきなのは、Ruben (1988)および鈴木 (2011)による三次元主義と永久主義の組み合わせである。私の考えでは、この新しいユニークな組み合わせについてはそもそもその両立可能性から吟味する必要がある (cf. Merricks (1995))、正確に評価するには本稿の主要テーマを外れて相応の議論を展開しなければならない。それゆえ検討は別の機会に譲ることにしたい。ただし一点述べておくと、マイノング主義に対する「生まれてこない人」が受け入れがたいという鈴木 (2011)、23-4 頁)については、本稿第 6 節の論点 (iv) の議論が一定の応答になると私は考える。

4 マイニング主義

P・ユアグローは死者を非存在の対象として扱うことで三つの問題の解決を試みる。ユアグローは、対象であることを量子「ヨ」や「有る(there is)」を用いて表現し、存在(existence)を述語「E!」を使って表す^{*19}。つまり「存在(exist)する」を原初的な述語とし、量化の対象であること、すなわち「有ること(being)」と区別する。たとえばソクラテスはかつて生きていてかつて存在したが、現在もはや存在しない。死者は、存在しない(「存在する」という性質をもたない)が、しかし有るような対象である。人は——ソクラテスもちろん——たとえ死んでも非存在の対象としてなんらかの意味で有るのであり、「消滅する”つまり無になることはない”^{*20}。それゆえ死者は害を被りうるような形で死後も有るのである。

まず(1)について。非存在対象に訴えることで、死の害の帰属時間に関する困難はなくなり、生前に被っていたという説明も、死後に被るという説明も可能である。そしてユアグロー自身は次のように説明する。死の害はまさに、非存在の状態にある死者に対して死後に帰属させられる。死者には身体も意識もないため、死者が被りうる害とは内在的状态を必要としない「純粹に關係的な害悪」である。(さらにユアグローによれば、死の害悪を説明するものとは「死者が拒まれている生であり、生が前提条件となっているような全てのものを享受する可能性である」。ユアグローのこの見解は、剥奪説の一種として理解することもできるだろう。)^{*21}

(2)についても、生きていた人によって態度を向けられる対象は非存在の死者であると説明される。たとえば死後も愛されている人は、死によって非存在にはなつたが有るような、生きていたときに愛されていた人と同じ対象である^{*22}。追悼は生きていた人と同じ対象に対して、その対象が非存在の場合にだけ正しくもつことのできる関係である。(3)については次のように説明される。名前が与えられるのは量化される対象に対してである。その範囲は存在者という狭い領域に限定されるものではない。死者の名前は存在

^{*19} Yourgrau (1987), pp. 89-90[邦訳 196-7 頁]。以上の記法はT・パーソンズのマイニング主義的な対象の理論に従ったものとユアグローは述べている。だがどのような対象を非存在対象と考えるかに関して両者は見解を異にする。パーソンズはペガサスのような架空の対象を非存在対象の例とし、死者をその例とは考えない(Parsons (1980), p. 11)。他方でユアグローは、架空の対象について、それらは「無(nothing)」であるとし、無ではない非存在対象である死者と対比している。ユアグローは「(a) 生まれていないもの(unborn)、(b) (たんなる)可能世界、(c) 過去や未来自体」(Yourgrau (1987), p. 88[邦訳 196 頁])を認めざるをえない非存在対象として挙げている。ユアグローの言う“unborn”には、まだ生まれていない人だけでなく、結局生まれてこない人も含まれる(Yourgrau (2000), p. 63)。パーソンズ以外のいわゆる「新マイニング主義者」には、E・ザルタ(Zalta (1983))やG・プリースト(Priest (2005))らがいる。彼らの枠組みにおいて死者がどう扱われるかは興味深い課題であるが、本論文の範囲を超えている。

^{*20} Yourgrau (1987), p. 90 [邦訳 197 頁、訳は議論の文脈に合わせて適宜変更を加えている]。別の箇所でもユアグローは「あなたの死はあなたの存在を消し去るが、あなたの『有ること(being)』を消し去りはしない。死は(そして何ものも)あなたが存在するようになる可能性を消し去れない」(Yourgrau (2000), p. 50)と述べる。またユアグローの擁護するマイニング主義は、次節で取りあげるシルバースタインの立場と対比して正確に述べれば、時間的部分を認めない「三次元主義」と、時間と存在に関する「現在主義」と、非存在の対象を認める「マイニング主義」を組み合わせた見解である。

^{*21} Yourgrau (1987)からの引用はそれぞれp. 86 と p. 87[邦訳 195 頁、訳は議論の文脈に合わせて適宜変更を加えている]。

^{*22} ここで重要なのは死者がかつての生者と「同一」の対象であるという点である。その論点は明らかに固有の哲学的問題を含むが、それについては本論文の最後(第7節)で少し触れる。

していないが有るような対象を指示する^{*23}。

5 四次元主義

H・シルバースタインは四次元主義を援用することで関連する諸問題の解決を試みている。一般に四次元主義のもとでは、現在の対象が存在するのと同じ意味で過去と未来の対象が存在する。というのも四次元主義のもとで、時間は、空間的諸次元とそれ自体では区別されない第四の次元にすぎないからである(たとえばかつて存在していたソクラテスも、ここに存在しない人がどこか他の場所に存在するというのと同じ意味で、「無時間的に」存在する)^{*24}。さらに四次元主義は、こうした枠組みのもとで、人のような時間的に持続する対象が、現在の人部分や一年前の人部分といった時間的諸部分の総和であるとも主張する。

四次元主義者は(1)の問題をたとえば次のように説明できるだろう。すなわち、ある時点に性質をもつことは、四次元的対象にとって、ある時点の時間的部分が性質をもつことにほかならない。人は死後の時間的部分を端的にもたないが、無時間的に存在する生前の時間的部分に性質を帰属させることは可能である。(2)についても同様に、無時間的に存在する人々の時間的諸部分の順序対によって関係は定義できる。(3)については次のように説明可能であろう。四次元主義の量化の対象領域には、過去、現在、未来の存在者が含まれ、死者の名前は適切な時間的部分(おそらくは最大部分すなわち人生全体)を指示することになる。たとえば「ソクラテスは哲学者であった」という言明は、その発話の時点より前に存在するソクラテス全体のうちのある時間的部分が、哲学者だという性質をもつことによって真である。

シルバースタイン自身の見解により沿う形でも(1)について述べておこう。四次元的対象がある時点に性質をもつとは、その対象の存在するある時間的部分が性質をもつことであり、害についても「生前に」被るとするのが(上に示したように)一つの自然な説明であると思われる。だがシルバースタインは次のように、被る時点が特定されない害があると主張する。怪我をすることや言葉によって心理的に傷つけられることで被る通常の害は、害を被る人の内在的状态を必要とする。そのような害は、害を被る本人のパースペクティヴ(シルバースタインの言う「零次元的枠組み」)において説明される。他方、陰で中傷をされたり自宅が火事になっていることによる害は、害を被る本人がそのことに気づかなくとも被ると考えられる害である。シルバースタインによれば、われわれはこのような害を、同時に存在しているということ(「三次元的枠組み」)から主張するが、それらが「どこで」起こっているのかと問うても答えはない。同様に、時間を空間と類比的に扱う四次元的枠組みに基づいて、「いつ」起こっているのかという問いに対する答えが存在しないような害があると考えることができる。例化する地点が特定されない性質があれば、例化する時点が特定

^{*23} ユアグローの主張の力点は、もはや存在しないものについての言明の有意味性や真理性の説明にあるように見える。ユアグローは、「存在しない」と述べつつ量化を行うことを繰り返し批判している。

^{*24} シルバースタインは「四次元主義(四次元枠組み)」ということで、時間と存在(リアリティ)に関する立場である「永久主義」をも主張している。実際ここまでの主張は、正確には、永久主義の主張にほかならない。「四次元主義」と「永久主義」は多くの文脈において区別する必要があるだろう。だが本稿において「四次元主義」と述べるときには、もっぱら永久主義を採るシルバースタイン的な四次元主義を念頭においている。

されない性質も認めるべきである。そうシルバースタインは主張するのである^{*25}。

害を被る時間に関するシルバースタインの上記の見解を受け入れるかどうかはともかく、時間を空間と同様に考えることで死者が「無時間的に」存在していると主張する点に四次元主義の眼目がある。つまり、それによって、いずれにせよ死者に対して有意味に性質を帰属させることができるのである。

6 マイノング主義の擁護

以上、三つの衝突として冒頭に整理した「死者の問題」に対する諸アプローチを見てきた。はじめに見た剥奪説とPF説だけでは(1)、(2)、(3)の三つの衝突をすべて解決することはできない。その理由は簡単である。二つの見解が形而上学的枠組みに対し中立的だからである。

死者の問題に答えるためには、剥奪説とPF説のどちらの理論も、なんらかの形而上学的枠組みを採る必要がある。二つの理論は、じつのところマイノング主義と四次元主義のどちらとも、それぞれ組み合わせ可能である^{*26}。われわれはどちらの枠組みを採用すればよいのだろうか。以下で私は、死者の問題に対して、それぞれの形而上学的枠組みがどのような固有の帰結をもつのかを検討し、それらの枠組みを比較しようと思う。その検討と比較は主として四つの論点(以下の(i)から(iv))について行われる。

^{*25} Silverstein (2000), p. 133 n. 13. シルバースタインはこのような害を「無時間的(atemporal)」な害と呼ぶが、私の考えでは、それは、時間と空間が類比的であるという(この節の最初に述べた)意味での「無時間的」と区別しなければならない。シルバースタインは、「賞賛される」を彼の言う無時間的(atemporal)な述定の例として次のように説明する。「ナポレオンに対する私の答えは次の通りである。ナポレオンは1769年から1821年まで生きた。彼は2000年に賞賛される。それがこの事例の“いつ”についての真実のすべてである。賞賛されるという性質を“いつ”ナポレオンが例化(exemplify)するかについてのさらなる問いなどない。」(ibid., p. 133 n. 13. またSilverstein (1980), p. 421も参照のこと。)害を被る時間が特定されないというのは、害を被るという性質がどの時間的部分に帰属するのかが特定されないという意味である。四次元時空間に存在する(この節の最初に述べた意味で「無時間的に」存在する)ナポレオンは、その意味では——つまり存在するのが特定の時間的部分であるという意味では——存在する時間が特定される。この主張によってシルバースタインは次のことを意味していると思われる。つまり、時間的に離れた二つの時間的部分(賞賛されるナポレオンと賞賛する後世の人)が関係項として一つの賞賛関係を構成するため、賞賛関係が位置づけられる単一の連続する時間は特定できない。だが、賞賛されるという性質が、1769年から1821年に存在するナポレオン(の時間的部分)において例化すると述べることに、特別な困難があるとは私には思えない。関係と関係の性質を区別しなければならない。ある特定の時間に「賞賛する」と説明できるのと同様に、ある特定の時間に「賞賛される」と説明することにはなんの問題もなく、無時間的(atemporal)であると主張する眼目はないように思われる。

^{*26} たとえば剥奪説を採るフェルドマンは、自身の見解がシルバースタインの説と親和的であるという主張を行う(Feldman (1991), p. 220)。PF説(生前説)を採るルーパーもシルバースタインの見解と整合的だと述べる(Luper (2007), pp. 250-1. ただしルーパーはLuper (2009), esp. pp. 123-4において剥奪説を擁護し、害を被る時間を特定する必要はないという見解——「人生全体として」ないし「現在および私が存在する他の時間すべてにおいて」という意味で「無時間的に(timelessly)」被るという見解——を示唆する)。剥奪説を採るB・ブラッドリーは「ゼロの幸福のレベルをもつという性質」を死者が死後にもつという主張を行っている(Bradley (2009), pp. 98-111)。ブラッドリー自身そう述べるわけではないが、このような死後の性質帰属はマイノング主義を採用することによって可能になる。他方、PF説(生前説)もマイノング主義との組み合わせが可能である。ただしその場合、死後に性質帰属が可能であるというマイノング主義の利点は(1)の衝突の解決に活かされない。あるいはBaber (2010)のように、欲求充足に基づく死の害の説明を行いながら、PF説のもつ理論的な自然さを捨て、害の帰属時間を死の時間(つまり欲求を挫く事態の生起する時間)とする提案もある。このような主張もマイノング主義によって可能となるだろう。

(i) まず第一点目。ユアグローは次のように四次元主義を批判する。四次元主義において「存在」とは「どこかにいつか存在している」という意味であり、これはそもそも終焉テーゼを放棄していることになる^{*27}。だがこの批判が公平なものであるかは明らかではない。というのも、四次元主義者は次のように主張できるからである。四次元的対象として永存(perdure)する存在者にとって、ある時間においてすでに死んでいるということは、その時間を占めるその人の時間的部分が端的に存在しないということにほかならない。それが終焉テーゼの意味するところである、と。マイノグ主義の行う「存在する」と「有る」とのあいだの理論的区別と比較して、四次元主義者のそのような理論的言い換えがことさら死についての常識的理解からかけ離れているとは言えないのではないか。ユアグローのようなタイプの批判は、マイノグ主義の利点を示すものとしてときに主張される^{*28}。だがそこまでの評価はできないというのが私の考えである^{*29}。

(ii) 第二の論点は多少込み入っている。まず私の見るところ、そもそも死者についてどのように語るべきかに関して、われわれは(このあとに示す)両立しない二つの直観をもっている。第一の直観はここまでも前提としてきた、「死は死んだ当人に害を与える」という直観である。第二の直観はここまでも前提にすることのなかった「死者はなんら害を被りえない」という直観であり、それについてはあとで説明する。最終的にどちらの直観を(どのようにどの程度)重視した理論を組み立てるべきかは分からない。しかし、少なくともこの論文ではまだ、いずれかの直観を最初から無視することが私にはできない。それゆえ、以降では一方の直観のみを前提とすることはせず、それぞれの直観に従った二つの場合を考察することにしたい^{*30}。

まず第一の直観に従い、死は死ぬ人に害を与えると考えよう。すでに第2節で指摘したように、死の害がまさに死の害であるのは、死んだ人が死によってそれまでに被っていないかった害を被るからである^{*31}。頭が痛くなつてはじめてわれわれは頭痛の害を被るように、害とは一般にそのようなものではないだろうか^{*32}。上述した害に関する一般原理に従えば、死の害とは、生前にはまだ被っておらず死後にはじめて被

^{*27} Yourgrau (1987), p. 87[邦訳 195 頁]。

^{*28} たとえば B・B・レーベンブックもまた、次のようにシルバースタインを批判する。シルバースタインの四次元枠組みは「それによれば人が無時間的(atemporally)に存在し、あらゆる出来事と永久に共に存在する」という見解であり、「彼の見解はある人の死がその人の存在の終わりであるということを拒否している」(Levenbook (1984), p. 416 n. 8)。

^{*29} ただし(iii)で論じるように、終焉テーゼといかなる意味でも衝突しない語り方がマイノグ主義によってこそ可能になることを考えれば、(i)の論点がマイノグ主義の利点を示すという主張には正当性があるだろう。(i)の論点の評価において私が強調したいのは、四次元主義がただちに終焉テーゼと衝突するわけではないという点である。

^{*30} ちなみにこれらの直観は、死の悪さに関して一般に主張されることのある見解としてネーゲルが挙げる(Nagel (1979)の冒頭 p. 1[邦訳 1-2 頁])二つの対立する考え方のそれぞれに対応するものと理解することができる。

^{*31} 死の害(および死後の害)がパラドキシカルな問題としてそもそも理解されるのは、死後に死の害を被るという理解が共有されているからであると私は考える(解決としてさまざまな見解があるにせよ)。死の害を退ける次のエピクロスの論証も、害に関する一般原理「災厄は起こってはじめて災厄である」を前提としている。

[……]死は、もろもろの悪いものうちで最も恐ろしいものとされているが、じつはわれわれにとって何ものでもないのである。なぜかといえば、われわれが存するかぎり、死は現に存せず、死が現に存するときには、もはやわれわれは存しないからである。そこで、死は、生きているものにも、すでに死んだものにも、かかわりがない。なぜなら、生きているものところには、死は現に存しないのであり、他方、死んだものはもはや存しないからである(エピクロス『エピクロス: 教説と手紙』、出隆・岩崎允胤訳、岩波書店、1959年、67-8頁)。

^{*32} 頭痛が起こることに対する不安は頭痛より前に生じうるが、その不安は当の頭痛の害ではない。あらかじめ頭痛薬を飲むなどして頭痛を回避できれば、頭痛による害は被らない。しかしとうぜん、それによって不安が無かったことになり

るような(それゆえ時間的に被るような)害であることになる。言い換えると、ある人に対して死の害を帰属させることの可否が、生前と死後とで非対称的なのである。死者(死の害)に関する以上の語り方に従うなら、四次元主義は死の害を適切に説明していないことになる。というのも第5節で見たように、四次元主義者は、死の害を——欲求の挫折による害であれ剥奪の害であれ——、人の存在する部分が生前に被るか、もしくは無時間的に被るような害として説明するからである^{*33}。他方、マイノング主義にとっては、主体がもはや存在しない死後のある時間において害を被ると説明する点に困難はない。

四次元主義者は死んだ後の人々に害を帰属させることができない。というのも、彼らの死後の時間的部分は端的に存在しないからである。だとすると、まさにその特徴によって前段落の非対称性を説明できないだろうか。一つ考えられるのは「限界づけられる悪」として説明することだろう。限界づけられることが、一般に、端的に悪いことだという主張自体は理解できる。われわれは自らの存在の小ささを嘆くし、限界があるよりは無いほうが善いだろう。人は空間的に限界づけられているが、死によって時間的にも限界づけられている。このことから、たとえば次のように主張されるかもしれない。四次元主義のもとで、人は生きて存在する空間的・時間的部分にだけ性質をもちうる。そのような性質には(典型的には感覚や経験などが可能にする)諸々の善さが含まれる。人が死ぬということは時間的に限界づけられるということであり、死後にはそういった(あらゆる)性質が欠落している。その意味で人はまさに死によって死後に害を被るのである、と。

だが、この説明はうまくいかないだろう。第一に、人は空間的にも限界づけられているが、そのことはふつつ害であるとまでは感じられない。かりにそれが害であるとしても、その害は死についてわれわれが考えるほどの害ではないか、別種の害と考えられるものだろう。第二に、人はたしかに時間的に限界づけられているが、その人が限界づけられていることは、生前の(存在する)時間的部分についての事実である。つまり四次元的対象には、存在しない時間的部分など端的に無く、限界づけられているとすればそれは存在する時間的部分なのである。そのため、限界づけによる害を被っているのであれば、それは生前からすでに被っていることになる。結局のところ、この説明は限界づけによる善の欠落という(外在的な)性質を人がもつという主張であり、その性質はあくまで生前にのみ存在する時間的部分に帰属するのである。いずれにせよ、限界づけられていること自体は、ここで説明すべき死の害に関する非対称性を説明しない^{*34}。

人が時間的に限界づけられていること自体は、たしかに問題の非対称性を説明しない。しかし四次元主義者は次のように説明するかもしれない。害を被るということが、善の剥奪や欲求の挫折、限界づけの

はしない。

^{*33} 害の帰属時間を生前だと主張するPF説(生前説)もまた、死の害を適切に説明していないことになる。ただし、欲求充足に基づく害の説明を行いながら、死の時間にその害を帰属させる見解も提案されている。注17、注26を参照のこと。

^{*34} 空間的な限界づけも害悪かもしれない。同時に距離の隔たった複数の場所に存在できないために、たとえば、仕事とパーティー(どちらも同程度に好ましい)の一方だけにしか行けないことは害悪であると言えるだろう。だがそのような場合にも、時間的な限界づけと異なり、空間的に限界づけられた外部で(参加していないパーティーの会場において)害を被るとは言わない。興味深いことに空間に関しては非対称性が生じないのである。

害といった性質を死者がもつことではなく、もっぱら死者以外の人物が否定的価値を帰属させることに存すると考えてみよ。すなわち、先に死ぬ人は後にも生き続ける人から見て不幸なのであり、それこそが死によって害を被るということの意味である。二人の人aとbがいて、aが先に死ぬとする。生き残ったbはaに死の害を帰属させる。bは(すなわちbのある断片が)、aの生前にはaが存在する時間の中に位置し、aが死んだ後には(bの別の断片が)aの存在する時間の外に位置する。そして、前者の場合には死の害を帰属させず、後者の場合に死の害を帰属させる。非対称性はそのように説明される、と。つまり、死者と、その時間的な外部に位置する生きている人の時間的部分との関係によって、時間的限界づけという死の害を説明するわけである。

しかしながら、四次元主義者が第三者的な帰属によって死の害を説明するのは困難であろう。bはaの生前に空間的にaの外にいるが、そのことによって、aに対し害を帰属させない。そして、四次元主義において空間と時間にそれ自体として本質的な違いはない。そのため、bは時間的に外にいることによってaに害を帰属させているのでもない。このように、否定的価値を帰属させる第三者の傾向が害の帰属の非対称性を説明しないとすると、むしろ次の順序で考えるほうが自然ではないだろうか。つまり、害の帰属の時間的非対称性が事実としてまずあり、その事実こそが、非対称的に害を帰属させたくなるわれわれの傾向を生み出しているのだ、と^{*35}。

以上のように、第一の直観——死によってはじめて死の害を被るという直観——に基づけば、マイノング主義の優位性が示されると言える。ただし、護りうる直観として次のような第二の選択肢もあると思う。この第二の選択肢は、ここまで述べた第一の直観と相容れない(終焉テーゼをある意味強く支持するかもしれない)直観である。すなわち、死の害を死後に被ると説明する必要はないか、あるいはむしろ避けるべきかもしれない。ネーゲルは、死が「肯定的にせよ否定的にせよ、いっさいの価値を持ちえない」^{*36}という考え方に言及している。あるいは、「死んでしまったいま、幸せだとか不幸だとか言うのは無意味だ」といった言い方を耳にすることがあるだろう。こうした第二の直観に従えば、害一般について、第一の直観と裏返しの仕方ですべて生前と死後の非対称性がある——むしろ生前にこそ害を被ることができ、死後には害を被ることができない——ということになる。その場合、(1)の衝突はそもそも生じない^{*37}。

^{*35} たしかに次のように言えるかもしれない。aよりも後まで生き残るbは、aの死にさいしてはじめて、aの境界づけを目の当たりにするのだ、と。だがそのときbが目の当たりにするその害は、aが被っているとすれば、aの生前に帰属する(すなわちaがかつて被っていた)害のほうである。さらに言えば、時間的な境界づけを目の当たりにするもう一方の場面、つまり誕生にさいしてわれわれは害の帰属を行わない。いずれにせよ四次元主義によっては説明されない非対称性があると見えるだろう。

^{*36} Nagel (1979), p. 1[邦訳2頁]。ただしこれはネーゲルが最終的にコミットする立場ではない。ネーゲルはここでは、この見解を、終焉テーゼの帰結の一つとして提示しているように見える。

^{*37} 吉沢(2011)では、この第二の直観に沿うことが、いわゆる人生の「無意味さ」の問題に対し一つの重要な帰結をもたらすことを指摘した。またL・W・サムナーは次のように述べ、死者が利害の主体になりうるという見解に反対している。「死にはきわめて救いが少ないが、その敷居をまたげばさらなる不幸の心配がない、ということがそのうちの一つであるのはたしかである。われわれ生命に対してその死後に何が降りかかるろうとも、われわれにとってさらに悪くなることは何もない(悲しいかな、善くなることもない)。死が終わりであるということは、思慮深さの点から言って、その生が不可逆な衰退に向かうと思われる人にとって、常に自殺のもつ主要な魅力であり続けてきた。災難が墓を越えてわれわれを追いかけるとしたら、どこに安らぎを求めたらよいというのか。」(Sumner (1996), p. 127.)サムナーのこの見解も、それに全

第二の直観に従うと、死の害を死後に被ると説明できることにはなんら利点がないどころか、むしろ説明を行うべきではない。したがってユアグローの見解には修正が必要になるだろう。ユアグローは、知らないところでの裏切りといった純粹に關係的な害との類比によって、内在的状態の無い非存在の対象(死者)は死の害を被ることができる^{*38}。死者には少なくとも意識や身体などの内在的状態は無く、このような類比は死者のような非存在の対象が害を被りうるという説明として一定の説得力があるように見える。だが、このもう一つの直観に従えば、ユアグローのアナロジーは重要な点において成り立っていないように思われる。つまり、死者は内在的状態が無いだけでなく存在もしないのであり、存在しないということは内在的状態が無いことではなく内在的状態があつたり無かつたりしないことである。

しかしながら、存在しているということを書を被っていると言えるための必要条件とする立場——つまり死者はなんら害を被りえないとする立場——自体は、マイノグ主義にも開かれている。では、四次元主義はどうか。四次元主義も同様にこの第二の選択肢を採用することになんら困難はないと思われる。四次元主義のもとで、人の生前の時間的部分は害を被りうるが、死後の時間的部分はいかなる害も被らない。それは、存在しない時間的部分が端的に無いためである。第一の直観を説明しない時間的な限界づけが、こんどは第二の直観を説明する。もし第二の選択肢だけを考慮すれば、(ii)の論点によってはどちらの見解にも優位性は示されないとと言える。

(iii)マイノグ主義の優位を示す第三の論点を挙げるができる。われわれと死者とのあいだにはさまざまな関係が成り立つ^{*39}。それらの関係には、愛のようにその対象の生前から成り立つ関係もあれば、追悼や供養のようにその対象の死後にだけ成り立つ関係もある。前者の種類の関係にはその対象が存在しているかどうかに関する含意はないが、後者の種類の関係は、語の本来の意味において、生きていて存在する人と死んで存在しない人とのあいだに成り立つ関係であると思われる。われわれと死者とのあいだにこうした関係が成り立つとする理解は、(ii)における第一の直観の一部を成すものである。しかしながら、それらの関係についても、(ii)における第二の直観がありうるように思われる。つまり、ある人が死によって存在しなくなれば、本当のところ、文字通りには、その人に対して態度を向けることさえできなくなるのかもしれない。「もはや彼はいないのだ、愛することなど意味がない、追悼などしてもむなしただけだ」というような言い方も、死がわれわれにとってひどく悪いということの意味として理解可能ではあるだろう。そういう表現は前述の第二の直観の適切な表現でありうると私は考える。つまり、関係に立つはずの一方の人の死によって、その関係は挫折するのである。もしこちらの直観に従うとすれば、人は死後のいかなる時間においても愛されることも追悼されることも厳密にはない——供養についても同様である^{*40}。また

面的に共感できるかどうかはともかく、ここで述べた第二の直観と通底するものだろう。

^{*38} Yourgrau (1987), pp. 86-7[邦訳 195 頁].

^{*39} 追悼や供養や愛といった関係について、たとえば「ソクラテスを愛する」といった態度を「ソクラテス様 (Socrates-wise) に愛する」といった仕方態度の対象にコミットせずに分析する副詞説などの立場がありうる。本稿ではそのような立場は採らず、関係を諸対象のあいだに成り立つ文字通りの関係として素直に考える。かりに副詞説のような立場が正しいとすれば——第二の直観をどう扱えばよいのか分からないが——、おそらく論点 (iii) の評価に関してマイノグ主義と四次元主義は対等になる。しかしながらそうだとすると、総合的な評価としてマイノグ主義の優位性がまったくなくなるわけではない。

^{*40} 第二の直観はまさにこうした追悼や死者への愛の不可能性の表明だとも言える。しかし、「追悼」と呼ばれるわれわれ

(2)の衝突はそもそも生じないことになる。

二つの形而上学的枠組みはそれぞれの直観を説明することができるだろうか。まずはマイノグ主義について。第一の直観によれば、われわれと死者とのあいだには愛や追悼などの関係が成立する。マイノグ主義のもとで、それらの態度の対象はいずれも、有るけれどもはや存在しない対象である。そのため、態度の対象が非存在であるという含意をもつ関係についても、そういった含意をもたない関係についても、それらの日常的な語の使用とマイノグ主義が衝突する点はまったくない。それでは第二の直観に従う場合はどうか。第二の直観に従えば、関係にとってその両項の存在は重要であり、その対象の生前に成立しうる関係も、その対象が死んだ後には真正の意味で成立することはない。この第二の直観を説明する仕方として、(ii)と同様、次の選択肢がマイノグ主義には開かれている。つまり、関係項が両方も存在することを真正の関係が成立するための必要条件とする、という選択肢である。すなわち、マイノグ主義のもとで、死者とは存在という性質をもたない対象であり、死者との関係が真正の意味で成立するか否かは、直観に応じて定まる存在という性質の意味づけ(ないし重要性)によって決まるのである。このようにマイノグ主義は、第二の直観に沿った仕方ですべて「関係の挫折」を文字通りに語ることもできる。

それでは四次元主義はどうか。以下では、二つのバージョンの四次元主義を考えることにしたい。一つは、ここまで取りあげてきた、時間的隔たりと空間的隔たりを同等に考える純粋な四次元主義である。もう一つは、ある種類の関係に対して「同時存在要件」とでも呼びうる条件を課する四次元主義である。

時間と空間を同等なものとする純粋な四次元主義者にとって、「死者」とは過去に存在する人であり、われわれの態度の対象は過去に存在する時間的部分のうちのどれかである。しかしながら、「追悼」は、その語を自然に理解するなら、ある人が存在しなくなったということに対するわれわれの悲しみの態度と本質的に結びつくものであるだろう。そのような態度はもとより存在しない人に対して向けられるものであり、たとえ過去にであれ存在する人に対しては、本来の意味で「追悼」することはできないと言わなければならない。したがって、存在しないものに対して追悼や供養といった関係を結びうることを含意する第一の直観について、純粋な四次元主義は自然な仕方ですべて十分な説明を与えられないと思われる^{*41}。では第二の直観についてはどうか。第二の直観とは、死者との関係は成立しないというものであった。だが、純粋な四次元主義のもとで、死者とは過去に存在する人である。そのため、追悼も(語の本来の意味に沿う仕方でないにせよ)、愛も(対象の生前と区別されることなく)、対象の死後に成立してしまうのである。時間と空間を

の日常的営みを理論が抑制するかどうかは、また別の問題である。というのも「追悼」や「死者への愛」を、死者の存在に関わらない形で系統的に扱う道が理論にはあるからである。たとえば追悼は、追悼する側のある種の心的状態によって還元的に説明できるかもしれない。存在しないソクラテスに対する追悼とは、ある固有の感情を伴う「ソクラテス的」な心的状態を追悼する主体がもつことだ、というわけである。あるいは、死者への「追悼」は本当は誤りなのだが、生き残った人の慰めになるという社会的有用性によって、そのように呼ばれる営みは正当化可能だ、とされるかもしれない。

^{*41} ある人に対する追悼や供養を「その人の時間的部分はこの(発話の)時間に存在しないが、その人の時間的部分がこの(発話の)時間に存在していたらよかったのに」という態度として、四次元主義者が説明できると思われるかもしれない。だが(ii)で挙げた論点同様、空間的に距離を隔てて存在する(生きている)相手に向ける態度と、時間的に距離を隔てて存在する(死んでいる)相手に向ける態度の違いを純粋な四次元主義者が説明するのは困難だと思われる。もちろんわれわれはこの二つの態度を区別している。

同等に考える純粋な四次元主義者にとって、死者とのあいだに時間的な隔りがあることは、死者との関係の成否を左右するようなものではありえない。純粋な四次元主義者は、死者との関係の挫折を意味する第二の直観を説明するための手立てをもたないのである。

だが四次元主義者はこの問題に対して、次のような道具立てを付け加えることで、より柔軟な応答を試みるかもしれない。すなわち、ある時点においてある種類の関係が成立するには、その時点で、関係項である二つの時間的諸部分の両方が存在しなければならない、とする制約条件である。つまり、ある種類の関係の成立にとって関係項のあいだの時間的隔りは認められないとするわけである。このいわば四次元主義の拡張版によれば、ある種類の関係については同時存在要件を課すことが適切であり、別の種類の関係についてはそうではない。たとえば「愛する」にはそうした制約を課すことが適切であると考えられるかもしれないし、「思い出す」といった述語にそうした制約は不適切であるだろう。同時存在要件を課された関係が対象の死後の時間において成立することはない。それは、ある人の死後にはその人の時間的部分が端的に存在しないからである。そのため「愛する」という述語に対して同時存在要件をもし課すとすると、ある人の死後にはその人に対して愛するという関係はいっさい成立しない。「追悼する」に同時存在要件を課すとすると、追悼の関係は、その言葉の意味からして対象の死後にしか成立しえないにもかかわらず、その時間には追悼の対象の時間的部分が存在しないため、けっして成立しない。すなわち、パラドキシカルなことに、追悼の関係は「本来の」意味で成立しえないことになる。このように、拡張された四次元主義は、第一の直観に関しては純粋な四次元主義と違わないにしても、第二の直観に関してはそれを尊重する説明を与えることができそうである。つまり、対象の死によるある種の関係の挫折（関係の成立の不可能性を）たしかにうまく説明するよう見えるのである。

上の二つの論点(ii)と(iii)がもつ意味を整理しよう。まずマイノグ主義は、追悼や愛などの自然な意味を保存しながら、第一と第二のいずれの直観をも説明することができる。マイノグ主義のもとで死者とは存在しない対象であり、存在の意味づけ(ないし重要性)に関する二つの直観のどちらかに従うかに応じて、死者に害が帰属するか否か、死者とのあいだに真正の関係が成立するか否かが決まるからである。第一の直観だけを考慮したとき、(ii)と(iii)のいずれにおいてもマイノグ主義の優位は決定的だと言える。第二の直観だけを考慮したとき、(ii)においてはいずれの理論にも優劣はない。(iii)においても、マイノグ主義と同様に、あるタイプの四次元主義(拡張版四次元主義)も第二の直観と整合的でありうる。だがそれは、同時存在要件という道具立てによる拡張との引きかえによってであり、さらに同時存在要件は、四次元主義の本来の趣旨からすれば不純かつ後退的な道具立てであると言うことができる。というのも、四次元主義は時間と空間を同等に扱うことにその主要な説明力を負っており、同時存在要件は述語に応じてそれらを同等に扱わない制約を課す条件だからである。またさらに言えば、さまざまな関係のあるものに対してだけアドホックでない仕方でのような制約を加える基準がどのようなものなのかを明示するという課題が、拡張版四次元主義者には残される。対照的にマイノグ主義者は、理論に新たな拡張を加えることなく、いずれの直観に従った場合にも「存在しなくなる」ということによる生前と死後のコントラストを自然な形でよりうまく表現するのである。以上のことから、決定的とは言わないが、総合的に考えて、マイノグ主義のほうが優位であると言うことができるだろう。また私の関心に照らせば、第一と第二のいずれの直

観をもしじめから退けずにおけるという点を、マイノング主義の利点として付け加えてもよいだろう。

ところで、第二の直観に従う場合、死者に対する内実を伴う性質の帰属はありえず、またそもそも冒頭の(1)と(2)の衝突も生じない。だとするとマイノング主義の眼目がなくなるのではないか、と言われるかもしれない。しかし(1)と(2)の衝突が生じないとしても、依然として指示に関する(3)の衝突は生じる。マイノング主義はそれに対し素直な回答を与えることができる。つまり、マイノング主義者は死者について中身のある語り方ができないということを文字通りに語れるのである^{*42}。

(iv)しかしながらマイノング主義は受けいれがたい帰結をもつと言われるかもしれない。ユアグローによれば、非存在対象としての死者を認める以上、過去、現在、未来のどの時間においても存在しない、生まれてこない非存在の人が有るという見解をも受けいれざるをえない^{*43}。生まれてこない人については特定することも名指すこともできないとしても、そのことから生まれてこない人はいないと考えるのは「存在論を認識論と混ぜこぜにするという過失」^{*44}である。われわれが対象を有意味に指示できるかどうかとその対象が有るかどうかということは区別しなければならない、とユアグローは述べる。

まず、生まれてこない人について考えることは常識的ですからあると言える。われわれは実際に、ある人の誕生や存在がその人自身に及ぼす影響(貧困や資源の枯渇)に配慮し、妊娠を思いとどまったり政策決定を行ったりする^{*45}。そのように現実に配慮されて生まれなかった「私の七番目のきょうだい」や未来の世代の人は、生まれてこない人である。

それでもやはり、この見解はにわかには受けいれがたい帰結をもつように見えるかもしれない。だが、マイノング主義者は次のように適切に応じられる。もしマイノング主義から、生まれてこない対象が存在するという帰結が導かれるのであれば、それは端的に誤っておりそのような帰結を導く理論は拒否すべきだろう——そのようなものがどこに存在するというのか。しかしマイノング主義者が認めなければならないのはそのような存在者ではなく、せいぜい非存在という仕方では有る対象である——そのようなものは単に有るだけであり、どこにも存在しない。

7 終わりに

前節の議論が正しければ、それは全体としてマイノング主義の比較的な優位性を示唆するものである。そこで言う優位性とは、四次元主義というもう一つの代表的な形而上学的枠組みと比べて、われわれのさ

^{*42} 存在述語を導入せずに三次元主義を採り、なおかつ現在主義を採るならば、ソクラテスといった名前を述語として消去しなければならない。その場合、たとえばSを「…はソクラテスである」や一意にソクラテスを選び出す適切な記述として、「ソクラテスはもはや存在しない」という文は「 $\neg \exists x(Sx)$ 」と表される。他方マイノング主義のもとでは、同じ文を、パラフレーズすることなく名前「ソクラテス」をそのまま用いて「 $\exists x(x=\text{ソクラテス} \& \neg E!(x))$ 」と表すことができる。

^{*43} 注19を参照されたい。ただし、時間の経過とともに単調に増加していく対象領域を考えることは可能であり、生まれてこない人を認める論理的な強制はないと思われる。それが正しいとすれば、マイノング主義にとってこの帰結を受け入れるかどうかの選択肢は開かれており、受けいれずに批判を避けることも、受けいれて積極的利点とすることも可能である。したがってどちらにせよ、「生まれてこない人」はマイノング主義の難点にはならないだろう。

^{*44} Yourgrau (1987), p. 93 [邦訳 199 頁]。

^{*45} この問題はパーフィットによって論じられている。Parfit (1984), pp. 351-79 [邦訳 479-518 頁]。

まざまな直観をより包括的に、そしてより適切に、扱うという優位性である。マイノング主義がしばしば「奇妙」な枠組みの代名詞とされることを思えば、これは興味深い示唆であろう。

死者の問題の文脈でマイノング主義が直面する固有の問題のうち、本稿が扱わなかった重要な問題は次のようなものである。死者の問題を扱うとき、マイノング主義者は、個別的な死者と生者の通時的同一性を前提にして語らざるをえない(本稿の議論においてもそうであるように)。しかし(本稿で論じたように)死者はいっさいの内在的性質をもたないと思われる。そのような死者と、生者とのあいだの通時的同一性が、いったいどのように可能であるのか。死者についてのわれわれの語り方を軽視できないとすれば、その謎めいた「通時的同一性」を説明するという課題に取り組まなければならない。それは難問であり、それについては稿を改める必要がある^{*46}。

謝辞

本稿は、科学基礎論学会 2009 年度秋の研究例会ワークショップ「死者の存在論をめぐって」における発表に由来している。本稿の執筆のきっかけと執筆にとっての有益なコメントをくださった青山拓央、鈴木生郎、谷川卓、柏端達也の各氏、および本誌の二人の匿名の査読者にお礼を申しあげたい。なお本稿は平成 23～24 年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

参考文献

- [1] Baber, H. E. (2010). Ex ante desire and post hoc satisfaction. In Campbell, J. K., O'Rourke, M. and Silverstein, H. S. (eds.) (2010). *Time and Identity* (pp. 249-67). MIT Press.
- [2] Bradley, B. (2009). *Well-Being and Death*. Oxford University Press.
- [3] Feinberg, J. (1984). Harm to others. In Fischer, J. M. (ed.) (1993). *The Metaphysics of Death* (pp. 171-90). Stanford University Press.
- [4] Feit, N. (2002). The time of death's misfortune. *Noûs*, 36: 359-83.
- [5] Feldman, F. (1991). Some puzzles about the evil of death. *The Philosophical Review*, 100: 205-27.
- [6] ——— (2000). The termination thesis. *Midwest Studies in Philosophy*, 24: 98-115.
- [7] Hinchliff, M. (1988). A defense of presentism. Doctoral dissertation, Princeton University.
- [8] Levenbook, B. B. (1984). Harming someone after his death. *Ethics*, 94: 407-19.
- [9] Lewis, D. (2004). Tensed quantifiers. In Zimmerman, D. (ed.) (2004). *Oxford Studies in Metaphysics I* (pp. 3-14). Oxford University Press.

^{*46} マイノング主義による現在主義の擁護はHinchliff (1988)において試みられている。また、マイノング主義的現在主義を永久主義的存在論に関する代用品主義と捉える路線もある。たとえば、パーソンズの対象の理論に基づいた(D・ルイスによれば「いんちきの(bogus)」)マイノング主義的現在主義に対する批判的検討がLewis (2004), pp.7-11において行われている。ルイスによる主な批判は、現在例化している性質の集合によって対象を定義するパーソンズの理論では、過去の存在者の代用品(surrogate/ersatz)となる対象を構成するのに不十分だ、というものである。

- [10] Luper, S. (2007). Mortal harm. *The Philosophical Quarterly*, 57: 239-51.
- [11] — (2009). *The Philosophy of Death*. Cambridge University Press.
- [12] Merricks, T. (1995). On the incompatibility of enduring and perduring entities. *Mind*, 104: 523-31.
[邦訳:「耐時的存在者と永存的存在者の両立不可能性」『現代形而上学論文集』柏端達也・青山拓央・谷川卓編訳, 勁草書房, 2006: 37-55.]
- [13] Nagel, T. (1979). Death. In *Mortal Questions* (pp. 1-10). Cambridge University Press. [邦訳:「死」『コウモリであるとはどのようなことか』永井均訳, 勁草書房, 1989: 1-16.]
- [14] Parfit, D. (1984). *Reasons and Persons*. Oxford University Press. [邦訳:『理由と人格——非人格性の倫理へ』森村進訳, 勁草書房, 1998.]
- [15] Parsons, T. (1980). *Nonexistent Objects*. Yale University Press.
- [16] Pitcher, G. (1984). The misfortunes of the dead. In Fischer, J. M. (ed.) (1993). *The Metaphysics of Death* (pp. 159-68). Stanford University Press.
- [17] Portmore, D. W. (2007). Desire fulfillment and posthumous harm. *American Philosophical Quarterly*, 44: 27-38.
- [18] Priest, G. (2005). *Towards Non-Being: The Logic and Metaphysics of Intentionality*. Oxford University Press. [邦訳:『存在しないものに向かって——志向性の論理と形而上学』久木田水生・藤川直也訳, 勁草書房, 2011.]
- [19] Ruben, D. H. (1988). A puzzle about posthumous predication. *The Philosophical Review*, 97: 211-36.
- [20] Scarre, G. (1997). Should we fear death? *European Journal of Philosophy*, 5: 269-82.
- [21] Scott, D. (2000). Aristotle on posthumous fortune. *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 18: 211-29.
- [22] Silverstein, H. S. (1980). The evil of death. *Journal of Philosophy*, 77: 401-24.
- [23] — (2000). The evil of death revisited. *Midwest Studies in Philosophy*, 24: 116-34.
- [24] Sumner, L. W. (1996). *Welfare, Happiness, and Ethics*. Oxford University Press.
- [25] Yourgrau, P. (1987). The dead. *Journal of Philosophy*, 84: 84-101. [邦訳:「死者」村上祐子訳, 『現代思想:可能世界／固有名』23(4): 193-208.]
- [26] — (2000). Can the dead really be buried? *Midwest Studies in Philosophy*, 24: 46-68.
- [27] Zalta, E. (1983). *Abstract Objects: An Introduction to Axiomatic Metaphysics*. D. Reidel.
- [28] 一ノ瀬正樹(2011).『死の所有——死刑・殺人・動物利用に向きあう哲学』. 東京大学出版会.
- [29] 鈴木生郎(2011).「死の害の形而上学」.『科学基礎論研究』39: 13-24.
- [30] 吉沢文武(2009).「死によって誰が害を被るのか——剥奪説を批判する——」.『哲学の探求』36: 129-44.
- [31] — (2011).「死と不死と人生の意味——不死性要件をめぐるメッツの議論と不死に関するもう一つの解釈」.『応用倫理』5: 41-50.

著者情報

吉沢文武(千葉大学大学院人文社会科学研究科・日本学術振興会特別研究員 DC2)